

トンネルハウス「幸水」に適した長果枝の選定と利用法

トンネルハウス栽培の「幸水」では、予備枝から育成した80cm～1.3mの長果枝を用いることで、果実肥大が良くなり新梢の吹き上がりが少なくなる。

農業研究センター果樹研究所落葉果樹研究室 (担当者 :中満一晴)

研究のねらい

トンネルハウス栽培の「幸水」において、側枝および予備枝密度を高め、従来より長い、1.2～1.4mの新梢を長果枝として利用するせん定法が普及したことにより、樹勢強化と単収増大が図られてきた。しかし、強勢な新梢までも長果枝として利用することが多く、それが新梢の吹き上がりによる過繁茂や品質低下の一要因となっている。そこで、これらの問題を改善するため、長果枝の選定基準を作成する。

研究の成果

1. 果重については、長さ80cm～1mの長果枝で優れ、1.3m以上の強勢な長果枝で劣る。直接枝は、予備枝から育成した長果枝(予備枝利用区・慣行区)に対して、果実肥大がやや劣る(図1、2)。糖度については区間差はみられない。
2. 1.3m以上の強勢な長果枝では、種類(図1)に関係なく、夏季に新梢が櫛状に吹き上がり、次年度に短果枝として使えない場合が多い(図3、5)。
3. 腋花芽の着生については、予備枝から育成した新梢の方が直接枝より優れる(図4)。

普及上の留意点

1. 長果枝として利用する新梢は、なるべく腋花芽の多いものを選ぶ。
2. 腋花芽の着生が少ない年は、長果枝から伸長した中果枝(50cm程度)の新梢も利用して花芽確保を図り、翌年は必ず更新する。
3. 誘引労力の削減および大果生産のため、短果枝も利用する。1樹当たりの短果枝の利用割合は2～3割程度を目安とする。

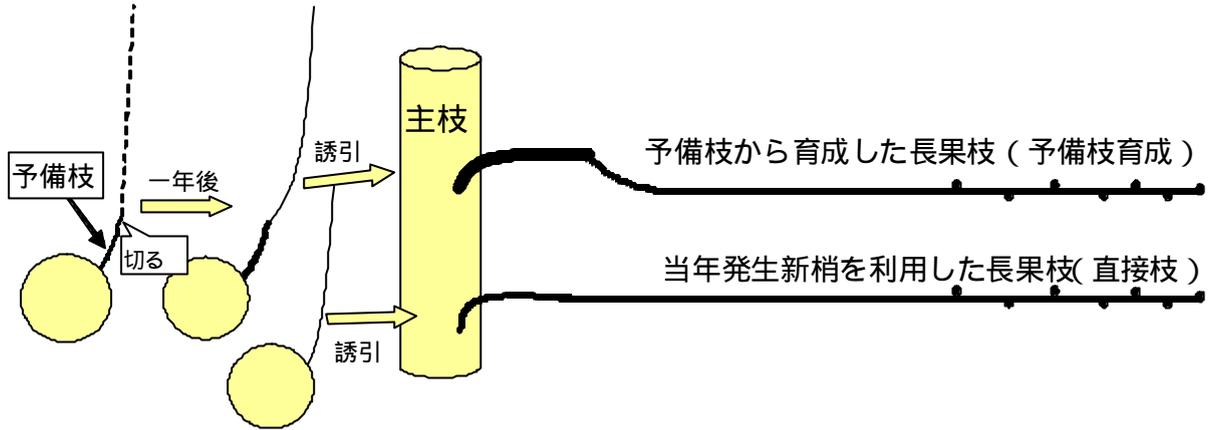


図1 長果枝の種類 (予備枝育成長果枝、直接枝利用長果枝)の模式図

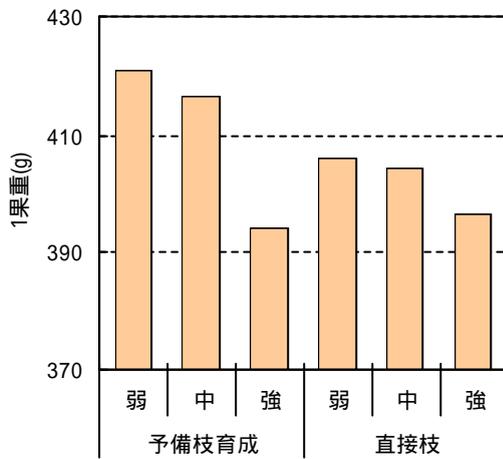


図2 長果枝の種類 強さと1果重との関係

注) 長果枝の弱～強は長さで判断。弱：80cm～1m、中：1～1.3m、強：1.3m以上 (2006,2007年調査)

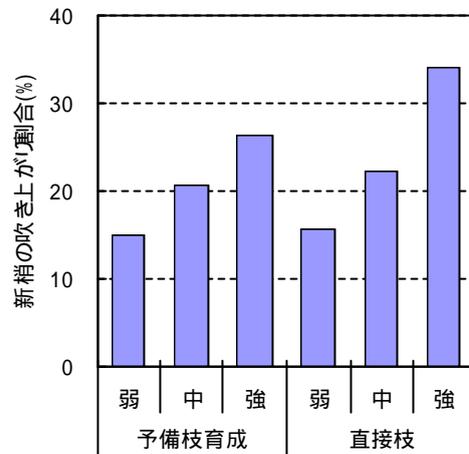


図3 長果枝の種類・強さと新梢の吹き上がりとの関係

係

注) 20cm以上伸長した新梢を「吹き上がり」としてカウントし、各長果枝の芽数で除して算出。側枝間隔は30cmで調整。(2007年調査)

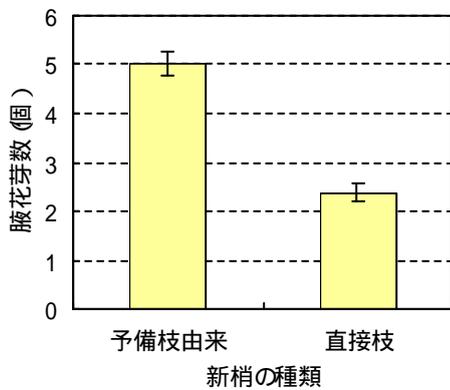


図4 新梢の種類と腋花芽着生数との関係(2005年)

1m以上伸長した新梢で調査



図5 強勢な長果枝での新梢の吹き上がり
長果枝として利用後の状態(冬)。新梢の吹き上がりは、強勢なものや、花芽の少ない長果枝が多い。